



一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133



日本ボリビア協会会報誌

カントウータ

Cantuta No.22

目 次

1. 事務局からのお知らせ
2. 『Los japoneses en Bolivia』刊行に当って・・・杉浦 篤
3. ジングルに消えた民族 2・・・大貫良夫
4. 今、ふりかえるボリビア・・・渡辺利夫
5. 私とラテンアメリカ・・・鈴木 渉
6. ブロッケオ・・・永井和夫
7. ボリビアで高山病に罹患しないために・・・杉浦 篤

一般社団法人 日本ボリビア協会  
平成 26 年 10 月 31 日発行

## 1. 事務局からのお知らせ

### 平成 26 年度理事会及び定時総会の開催

5 月 26 日 (月) 米州開発銀行会議室で午後 2 時より理事会、午後 4 時より定時総会が開催された。

第 1 号議案 事業報告及び収支決算承認の件

第 2 号議案 事業計画及び収支予算承認の件

第 3 号議案 役員選任・選定とその職務承認の件

第 4 号議案 その他

理事会については、理事総数 13 名中 6 名の出席となった為、新定款 32 条第 2 項の同意書方式により上記 4 件の議案に就き承認決議を得た。

定時総会については会員総数 84 名中 57 名(委任状を含む)が出席し新定款 18 条第 1 項に基づき定足数を満たしているため有効に成立し、第 1 号議案、第 2 号議案とも異議なく承認された。

第 3 号議案については、新定款 22 条第 1 項に基づき、理事 13 名 (松崎治夫氏は出身会社・住友商事(株)の人事異動により八代倫明氏へ交替、他の 12 名は重任)、監事 2 名 (重任) の選任と職務について満場一致で承認された。

第 4 号議案 その他として会員の入退会状況につき平成 25 年は入会 8 名、退会 2 名、差引 6 名増加して期末現在 84 名との報告が有り了承された。

## 2 「Los japoneses en Bolivia」刊行に当って

### 日本ボリビア協会 専務理事

杉浦 篤

ボリビアと日本との繋がり歴史は、1899 年に始まり既に 3 世紀に跨って 115 年の長きに及びます。その間、日本から、ボリビアへは約 1 万人近い日本人が、戦前は自由移民として、戦後は主として計画移民として海を渡りました。

戦前の自由移民の方々は、ペルー経由で、険しいアンデス山脈を徒歩で越え、あるいはアマゾンの源流を船でボリビアに入り、パンド、ベニのゴム園などで働いた後、それぞれ手に付けた固有の技能を活かして商業、サービス業や農

業などで自立し、コビハ、リベラルタ、グアヤラメルン、トリニダ、ルレナバケなどの北部・北東部に定住されました。そして一部の人達は資本を蓄えた後、南下してラパス、コチャバンバ、サンタクルスなどへ進出され、大都市で商業を中心として活発な経済活動を行い、戦前のボリビア社会で確固たる地盤を築かれました。第二次大戦時のアメリカ抑留などの苦難をも凌ぎ、今は、ボリビアの主要都市でシッカリと根を降ろして活躍しておられます。

戦後の計画移民の方々は東部サンクルス州のオキナワやサンファンに集団移住され、ジャングルを自力で切り開き大変な御苦勞を経て農牧畜業を興され、農牧組合を組織されて現在のボリビアで数少ない近代的組織形態の大規模農牧畜業を営み発展しておられます。

その一方で最初の入植地では定住困難に陥った方々は、一部日本へ帰国された方もおられましたが、その他はサンタクルスやラパス、コチャバンバなどボリビ国内の大都市や、ブラジルなど近隣南米他国へ再移住され、商業や農業、サービス業などの分野において南米大陸各地でそれぞれにしっかりと定住しておられます。

現在ボリビア在住の日系人・日本人は約 13000 人～14000 人とされています。

これらの方のご両親や、祖父母、曾祖父母から幾世代にも渡る艱難辛苦の歴史については、日本人ボリビア移住 100 周年誌『ボリビアに生きる』として当協会の理事の一人である国本伊代氏により編集され、ボリビア日系協会連合会より 2000 年 3 月に刊行されています。

しかし、この 100 周年誌は様々な事情から当時日本語版は刊行されましたが、スペイン語版は同時には実現しませんでした。偶々 2011 年に上記の国本伊代氏と、私がベニ・パンド・サンタクルス、ラパス、コチャバンバの各州を巡回訪問した際に、各地の何人かの日系人の方々から、既に日系人でも日本語が読めない二世・三世・四世の世代が多数を占め、自分たちの父祖の歴

史をもっと良く知りたいにも拘わらず言葉の壁ゆえにそれが適わぬ現状への解決策として、スペイン語版への翻訳刊行への強い要望を聞かされました。

国本・杉浦の二人は、ボリビア各地の日本人会・日系人会の連合組織であるボリビア日系協会連合会と相談し、日本へ帰国後、日本ボリビア協会として検討の結果、両組織の共同プロジェクトとして、この要望に応えることを決定し、2011年の10月から約2年、足かけ3年に渡ってボリビア・日本の両側有志のボランティア協力も得て取組み、2013年10月に漸く完成に漕着けました。

本書『Los japoneses en Bolivia : 110 años de la Historia de la Inmigración Japonesa en Bolivia』は 上記の『ボリビアに生きる—日本人移住 100 年周年誌』の中の歴史編第3部『日本人のボリビア移住 100 年の歩み』を原典とするスペイン語翻訳版です。

この原典は、ボリビアのほぼ全土に渡り地域別に移住者自身の手で書かれ、さらにそれを一国の移住の全体史として体系的にまとめられた数少ない書籍の一つです。

本書の特徴としては、日本語版からの忠実なスペイン語版翻訳に留まらず、スペイン語の読者に配慮して下記のような工夫を施し、ボリビア在住のスペイン語を第一言語とする日系人/日本人の世代が容易に読める一般書として平明に記述されています。

即ち、原典の出版された2000年から2011年までに起こった出来事を出来る限り加筆したうえ、日本語の直訳が意味不明なものにならないように、必要に応じて大幅な意訳を行いました。さらに、ボリビア日系社会で日常的に使用されている日本語を判り易くするために簡略な解説を付した用語一覧と略語一覧を追加しました。

そして、ボリビアを含むラテンアメリカのみならず、広く世界のスペイン語文化圏でボリビアへの日本人移住史に就いての一般読者への啓

蒙・理解の促進を図ると共に、学術研究の為の参考資料にもなり得るように心掛けました。

さらに、1980年代後半から始まった所謂出稼ぎブームに乗って日本へ渡り、20数年余を経て、今や日本に定住されている約6000人~8000人に上る在日ボリビア人・日系人の現状についても取り上げています。これらの方々は人口減少と少子化高齢化が急速に進む日本で、自動車、電機、建設土木・電気工事等の基幹産業を支える貴重な労働力として懸命に働いておられます。

このようにして生まれたこの書籍を、出来るだけ多くの方々にお買い求め頂けるように、一冊2000円+送料500円=2500円で頒布させて頂いています。

是非多くの方々にお買い求めいただき、御家族、御親戚はもとより日本人・日系人・ボリビア人問わず、友人知人の多くの方々にも広く読んで頂きたいと思えます。

そして、日本とボリビア両国の長く深い交流の歴史への理解を深め、ボリビア・日本両国間の友好関係が今後もより一層豊かに発展して行く一助となることを、心より念願しています。

なお、原典の日本人ボリビア移住 100 周年誌『ボリビアに生きる』(日本語版)や 昨年、刊行された『ラパス日本人会 90 年史』(日本語、スペイン語併記)『サンタクルス中央日本人会 50 年史』(日本語)も各々2500円(送料込)頒布しておりますので、よろしくお買求め下さい。

### 3 ジャングルに消えた民族 2

日本ボリビア協会副会長  
大貫良夫

#### トゥパリとの「再会」(2)

ところが、ブラジルの先住民族に関する情報を検索しているうちにトゥパリ族が出てきた。そして驚くべきことにフランツ・カスパーが2008年すなわち最初の出会いから60年後にトゥパリ族を訪れたという記事が出てきた。よく見るとそれはあのカスパーではなく、その息子であった。

しかも同姓同名である。このカスパール 2 世はスイスのベルン大学の心理学・心理療法学の主任教授であった。



写真1 トゥパリ族と歓談するカスパール教授

2005 年、あるジャーナリストがカスパールの本を持ってブラジルに行きトゥパリ族の末裔たちに会ったところ、なんと昔の村長ヴァイトーの息子コンクワッドがいて、何人かの住民とともに思い出を語ったのである。コンクワッドは父親がカスパールを次の村長にしたがっていたことなどを話したという。訪ねて来いという手紙を預かったジャーナリストはベルンで未亡人と 2 世に会う。手紙を渡された 2 世のカスパール教授はトゥパリ族を訪ねて大歓迎されたのだった。その記事には上半身裸になった教授が白い肌に、黒い線模様をペイントされて、楽しそうにトゥパリ族の男と歓談している写真が出ている。最初の訪問記を読んだ者としてはじつに感動的な記事であり写真であった。トゥパリ族は消えてはいなかった。

### セケリ再び

さて、ブラジルの熱帯雨林地帯におけるこうした大規模な変化に思いをはせているうちに、またもやセケリという名前に遭遇した。書店で偶然見つけた本の著者がチボル・セケリとあったのである。本の題名は『アコンカグア山頂の嵐』（栗栖継・栗栖茜訳、2008年海山社発行）という。スペイン語の原著は 1944 年にブエノスアイレス

で刊行、その後エスペラント語その他に翻訳され、日本語訳は 1990 年に刊行され、99 年にちくま文庫で出て、それから 2008 年に 3 度目の刊行となったということである。こういう本があることにはまったく気がつかずにいたので本を見て少し驚き、著者の名前でおやと思い、解説でこのセケリが国際博物館会議で数日一緒だったあのセケリ氏であると知って本当に驚いたのであった。解説ならびにインターネットでの情報によってセケリ氏のことをやや詳しく知るに及んで、あの時にもっと話を聞いておけばよかった、来日までしているのだからその時に日本で再会をしていたらと悔やまれることもしきりであった。

ともあれセケリ氏についてももう少し跡をたどることにする。彼は 1921 年スロバキアに生まれザグレブの大学を卒業した後、1939 年アルゼンチンに渡りジャーナリストの仕事に就いた。そして 1944 年、登山家ですでに南米大陸の最高峰アコンカグア 6960.8 メートルに 4 度も登っているヨハン・ゲオルグ・リンクとアドリアナ夫妻から、アコンカグア登山に誘われた。65 歳になる地質学者ワルテル・シラー教授ほか 5 人の登山経験者も一緒だった。

リンクも経験のある、今日ではノーマル・ルートとよばれるところが登攀ルートであった。オルコーネス谷の 4230 メートルの開けた場所がプラサ・デ・ムーラスというところで、そこにベースキャンプを設営した。途中で別の山に登ったりして高度順化にはとくに困難はなかった。そこからニド・デ・コンドレス、「リンクの避難所」と前進キャンプができ、先発して前進キャンプを作っていたツェフナー、ベルトーネ、セケリの 3 人は調子が良ければ登頂に向かえというリンクの指示で、1944 年 2 月 13 日午後 2 時、快晴に恵まれたアコンカグアの頂上に到達した。セケリは書いている。

「私たちは、ツェフナー、私、ベルトネの順に一列になり、5 歩ずつ離れて登った。ふいにツェフナーが岩の上で立ちどまり、満面に笑みをたたえて私たちの方をふりむいた。彼は缶詰の缶を手

にかかっていた。ベルトネと私は、ただ登りたいという執念で、ありったけの力をふりしぼり最後の数メートルを登りきった。数秒後、私たち3人はアメリカ大陸の最高峰に立っていたのである。」

「頂上からの眺めはすばらしく、誰でも一生のうちでこのような光景を見られる機会は、めったにないにちがいない。

しかし、アンデス登山家はこのパノラマのような景色を見るために、超人的な努力や犠牲を重ね、命を落とすことを覚悟で頂上をめざすのではない。世界中の登山家のあこがれの的であり、ぜひ登りたい対象であるこのアコンカグアという巨人の頭、素晴らしく美しい頂上自分たちの足の下にあるのだ、という勝利者としての感覚のためにこそ、あらゆる犠牲をはらっても頂上をめざすのである。

私たちは人間と自然との闘いの勝利者だが、この永遠の闘いの中で私たちのえた成功は、一つの砂粒のようにちっぽけなものである。しかし、主役として近くで細部まで見れば、壮大な叙事詩のようにくっきりとうかびあがってくる。」

一時間の頂上滞在を楽しみ、登頂の記念に何かを入れる小箱にあらたに小さな旗などを入れてから午後3時、3人は下山を開始してリンクの避難所に戻り、リンクたちの祝福を受け、それから全員がさらに下のニド・デ・コンドレスまで下りた。

2月16日リンク夫妻、愛犬フィフィ、グリム夫妻、クナイドル、体調の悪そうなシラー教授が出發した。頂上付近でビヴァークを覚悟しての登攀だった。セケリたち3人は17日にベースキャンプまで下りて存分に料理を作って食べた。しかしその夜からアコンカグアには猛烈な嵐が襲ってきた。

「その夜はひどい夜だった。今までになく寒気がきつく、吹きあれている強風にしても私たちが経験したことがない風速で、テントの柱をひくぬき、今にもテントごと私たちを、どこかへ吹きとばしてしまいそうだった。谷は両側が高い岩壁をかたちづくり、まわりの山の風の通路になっているので、風は巨大なオカリナのようにヒューヒューと

不気味な風音を立てていた。」

嵐は2月18日も19日も荒れ狂った。20日やや風がおさまり、セケリはラバ使いの男たちと上に向かい途中で消耗しきったグリム夫妻に出会う。頂上下のビヴァークから登頂を断念して下山し、ニド・デ・コンドレスで嵐から身を守ることができたという。しかしリンクほかの4人は下りてこなかった。セケリたちは21日6500メートルまで登ったがリンクたちの痕跡が何も見つからない。遭難は確実で、知らせを受けて他の登山者などが捜索に加わったが上部の情報はつかめなかった。ついに軍が捜索隊を出し、シラー教授の遺体だけを発見した。

年が明けて1945年、軍の捜索隊がまた動いた。セケリも同行した。そして頂上直下150メートルのところリンク、その少し上でアドリアーナの遺体を発見した。セケリたちは頂上に達し、そこに置いてある小箱を開けた。ノートがあり、リンク夫妻とクナイドルが登頂したこと、クナイドルの喜びと感謝の感想も書いてあって、3人は登頂後に遭難したことがわかった。なおクナイドルの遺体はさらにもう1年してから軍の登山隊によって発見された。

この遭難の顛末をセケリ氏は書いて本にしたのだが、それが日本語に翻訳されていたとは。なお、セケリ氏はこのあと2度ブラジルのジャングルに入り、文明世界と接触したばかりのシャバンテ族や、カラジャー族などの土地を旅行し2冊の探訪記を書いている。そして1948年ボリビアの大統領の招きでボリビアからブラジルに広がるジャングルの探検と開発計画の立案を依頼され、トゥパリ族の土地にまで入ったのである。

1954年ユーゴスラビアへ帰国、1972年からはセルビアのスポティツァにある博物館で仕事をするかわらエスペラント語の普及に力を注ぎ、その一方で世界中を歩き回る。1960年来日して4ヶ月をかけて日本の30都市を訪ねている。1965年、82年、86年にも来日した。彼がエスペラント語で書いた『クメワワ』という本は『ジャング

ルの少年』という邦訳で 1983 年日本でも出版、文部大臣推薦青少年向けの最良の書 4 点のひとつに選ばれ、30 万部も売れたとのことである。そして 1988 年にスポティツァで世を去った。67 歳とは早すぎる死であった。ボリビアからブラジル側のトゥパリ族を訪ねたスイス人の本からアコンカグアの遭難、モスクワでの博物館会議までつながっていく私的経験をお話した次第である。セケリ氏の生涯と仕事を詳しく跡づける本が日本のエスペランティストの手でできないものだろうか。

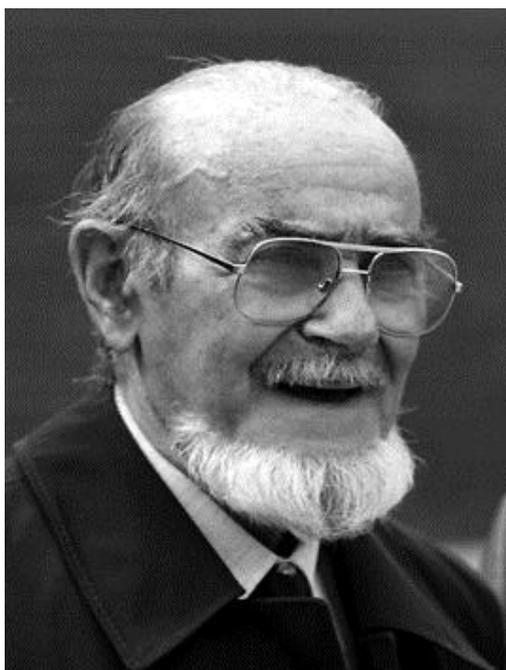


写真 2 チボル・セケリ氏

## 4 今、ふりかえるボリビア

### 前ボリビア駐在大使 渡邊利夫

ボリビアには都合二回在勤した。一回目は 1980 年から 82 年の軍政の時代であった。ペルーから着任直後にガルシア・メサ将軍がクーデタをおこした。人権侵害を行った政権として悪名高い。大使館の現地職員の息子さんが捕まって、色々手をつくして釈放にこぎつけたが、拷問を受け体のあちこちにあざを作っていたのが記憶に残る。

クーデタ後夜九時から外出禁止令が出た。本省に報告電報を送っていると、どうしても九時過ぎになり、一同そろって帰宅することになるが、途

中で撃たれてはたまらないので車の室内灯をつけて、ゆっくり走ることになる。途中で何度も軍の検問所で誰何される。最初は、なぜ遅くなったのか丁寧に説明していたが、色々とうるさいので、その内にこちらも頭を働かせて、大使館で酒を飲んでいたら時間がたつのを忘れ、遅くなってしまったと言いつつすることにした。それ以来、相手も飲んべいの兵隊さんのこと、いちいち詳しく説明する間もなく通してくれるようになったが、今から考えると、所管が違うとは言え取締まり当局に飲酒運転していますと白状しているようなもので、今から思えばおおらかな時代であった。今度ボリビアに赴任して、そのガルシア・メサ将軍を探したら、人権侵害の罪で刑務所に入っていた。

当時のボリビアは、歴史上 200 回近くクーデタが発生したとまことしやかに言われるほど、政情が不安定な国であった。2010 年 9 月ボリビアに再度赴任した時は、2005 年末の選挙で選ばれたアイマラ系先住民出身のエボ・モラレス大統領であった。その後、2 期 9 年間に着々と政権基盤を強化して、憲法上二選までだった任期を最高裁判所と話を付けて延長し今年 10 月 12 日の選挙で三選されて長期安定政権となった。

ボリビアは 1932 年のチャコ戦争に敗れ、多くの国土を失った。1952 年の革命はそれまで虐げられてきた底辺の人々のための政治をめざしたが、スズ産業の国有化、農地改革、普通選挙などの改革は行われたものの、ボリビアを構成するアイマラ族やケチュア族など、先住民のための政治は充分に行われなかった。政治を担ってきた 52 年の革命世代の政治家が相次いで亡くなり、軍部が政治の舞台から退場すると、先住民の政治力が勝る時代となった。

首都ラパスに富裕階層が多く住むカラコト地区があるが、そこには旧政権時代に財をなした白人クリオーリョ文化の人が多数住んでいる。現政権の人達はこの地区の人達と距離をおいているが、これらの富裕層はまだ経済的に隠然たる力を持っており、彼らの働きがなくては経済や社会が回っ

ていけないので、最後まで追い詰めるようなことはしていない。

ボリビアは、2009年2月公布した憲法で、「先住民・オリヒナリオス(「その土地の者」程度の意か)・農民(原語は *Indigena originario campesino*)」の国であると規定した。この国は、英、米、現在はグローバル社会から長い搾取の歴史を経験したとして、この新植民地主義のくびきから脱し、この土地本来の住民からなる多民族文化国家の再生を目指している。新憲法制定後国名も「ボリビア多民族国」に変えた。

この「ボリビア多民族国」のイデオロギーは「*VIVIR BIEN*(よく生きる)」である。この言葉を“より良く生きる”と訳すると、西洋の考え方である競争主義を含意することになり、その弊害も大きいので、先住民古来の文化である「*VIVIR BIEN*」にはなじまないとしている。ところで、外から来た者には「*VIVIR BIEN*」の思想が今一つ良くわからない。先住民社会は文字を持たなかったために、彼らは自らの文化を書き物にとどめることをしなかった。知る手懸りは先住民の言い伝えや共同体の生活の中にある。

どうもこの「*VIVIR BIEN*」(アイマラ語で *suma qamañ a*)の思想は、自然と調和ある生活・生き方を重視し、「母なる大地(PACHAMAMA)」や全ての存在(人間、動物、自然、そして宇宙、歴史)との共存・共生を大切にす思想である。従って気候変動や環境問題を重視し、PACHAMAMAとの共存の中で他人を思いやる心を大切にすることを重視している。現政府は先住民の地位と文化の復権のシンボルとして、新憲法第8条で、「国は、*ama qhilla* なまけず、*ama llulla* 嘘をつかず、*ama suwa* 盗まず、*suma qamañ a* よく生き、調和ある生活と良き人生、大地を守り、誇りある道、生き方という多民族社会の倫理道徳の原則を尊重、促進する。」と謳った。少し牧歌的なところがある。

この文化は、今世界の主流である西洋キリスト教文明から生まれた価値観と異なり、また現代世界の技術レベルに追いついていないという大きな

ハンディキャップを抱えている。現政府の要人もそれはわかっているようで、自分の子供を外国に留学させ、子供の方も民族衣装よりジーパンや日本のアニメが好き、ということになる。前回赴任していた時のように先住民系のご婦人がラパス市内を山高帽に民族衣装の「ポリェラ」で闊歩する姿を余り見かけなくなり、現在は西洋スタイルが太宗となった。

それでは「*VIVIR BIEN*」の思想は、現政権の「社会主義運動党 MAS」がアンデス地域の先住民社会から票を得るための旗印に過ぎないのか。結論を出すのは難しいが、言えることは、大学に入る時にもう先住民系の姓をクリオーリョ文化風に改姓する必要もなく、世論調査で中南米において良く“民主化”の進んだ国と評価されていることである。

## 5. 私とラテンアメリカ

前ドミニカ共和国日本大使館専門調査員

鈴木 渉

この度は歴史ある日本ボリビア協会の会報誌 *Cantuta* へ寄稿させて頂く機会を賜り厚く御礼申し上げます。

2011年から2013年の2年間、政治・経済、企業支援担当の専門調査員として勤務していた在ドミニカ共和国日本大使館時代に知り合い、昨年出版された「ドミニカ共和国を知るための60章」(明石書店: 国本伊代・中央大学名誉教授編著)でも共著者として活動させて頂いた杉浦専務理事にお誘い頂き、昨年に入会致しました。

小職の「ラテンアメリカ地域」との繋がりについて少し述べたいと思います。

1995年にさかのぼりますが、元々、米国の大学で「政治学」を専攻していました。当時から既に米国における「ヒスパニック系」の人口とその政治力の拡大は注目されており、スペイン語の授業を履修するきっかけとなりました。その後、数年間のIT企業における勤務を経て、1年弱スペインに

留学した後、カナダ・トレント大学に再入学し、国際開発学を専攻致しました。

「ボリビア」を知るきっかけになったのは、同大学のプログラムで1年間エクアドルに派遣され、主にボリビア人女性教授の下でアンデス地域の政治、経済、人類学を履修したことです。ボリビアと同様、エクアドルもインカ帝国の一部であり、その共通言語であったケチュア語や「プレ・インカ」時代から脈々と受け継がれる様々な言語やシャーマニズムの存在、インカ時代からの石造建築物、ココ、キャッサバ、キヌア、トウモロコシ、チチャなどの食物や酒類の普及、チャランゴなどの楽器を使ったフォロクローレ音楽、そして多くの先住民が暮らし、未だその人口の大多数が貧困や差別に苦しんでいる現実などが両国の共通事項であるかと思えます。また、両国は天然資源に恵まれながらも、先進国による搾取や天然資源輸出の過程における環境破壊・汚職の問題に晒されている上、国民間の貧富の差が激しく、度々先住民の反政府活動が起こる事も共通した社会・政治問題である、と同教授が強調していたのを思い出します。

エクアドルから帰国後、IT・通信企業における勤務を経て、英・マンチェスター大学で政治学の修士号を取得した際に、現地で知り合ったドミニカ共和国との学生との縁もあり、在ドミニカ共和国日本大使館の専門調査員として勤務することになりました。

一見、カリブ海に位置するドミニカ共和国とボリビアは気候や国民性の観点で共通点が無い様に見えますが、「対日関係」の部分では「日系移民」という大きな共通点があります。ボリビアでは、主に沖縄から多くの移民が同地に渡り、その勤勉さで現地に溶け込み、多くの信頼を受けていると伺っています（前述のボリビア人教授はコチャバンバの富裕層出身ですが、コロニア・オキナワについては良く知っているとの事でした）。

一方、1956 から 1959 年の間に、鹿児島県・福島県等から 1,300 人余りの日本人がドミニカ共和

国に移住しました。その後、数々の困難が彼らに降り掛かりましたが、現在は現地人との同化も進みつつも、日本人としてのアイデンティティと誇りを維持している日系ドミニカ人の第三・四世代が誕生しています。また、日本人移民の正直さや勤勉さへの評判、国家発展への貢献に対する評価は、ボリビアに渡られた日本人移民の方々と同様、現地では高いものがあります。

残念ながら、私は未だボリビアを訪問した事はありませんが、プレ・インカからスペイン植民地・現在に至る歴史、人類学観点から見た先住民の文化や言語、日系人の存在、そして、21 世紀における戦略的資源の供給や対外関係・国際舞台における「キー・プレーヤー」としてのボリビアの存在に大きく惹かれている次第です。今後、ボリビアに対する熱い気持ちを持たれている協会の皆様とボリビアを訪問し、同国を知ると共に、多少なりとも、日・ボリビア二国間関係促進のため、お役に立てれば幸いです。

御指導・御鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。

## 6. ブロッケオ

日本ボリビア協会監事

元 JICA ボリビア事務所長(2000 年 5 月  
から 2004 年 3 月まで)

永井 和夫

ボリビアのブロッケオ（道路封鎖）は文化だという。幹線道路に大小様々な石を並べる。大きい石は直径 1 メートル近くに達する時もある。いくら多数でも人力だけでどのように運んできたのか不思議だ。ブロッケオで自動車の通行を遮断する。無理やり通ろうとすると、車に石を投げつけられ窓ガラスが砕け、車体に傷がつく。しかし、徒歩での通過は自由である。何の危険も感じない。救急車が来れば通過させる。問題が解決すれば石は軍の手で直ちに撤去される。文化と呼ばれる所以である。

ブロッケオは主に行政に不満を持つときに要求

貫徹を目指し住民組織があるいは労働者が行う。自動車という西洋の文明に対する抗戦の象徴なのだろうか。抗戦は行政の最小単位の村レベルから、大きいものは県レベルあるいは全国レベルで行われる。村単位のブロックオはいつでもどこで行われるか予想がつかない。自動車に乗っていて突然ブロックオに出くわす。じっとその場でブロックオの終わるのを待つか、迂回するか、あるいは歩いてブロックオを渡るかである。大規模なブロックオをアルフォンブラ（絨毯）と呼ぶ。長さ数百メートルにわたり大小さまざまな石が敷き詰められる。絨毯のごとくである。ブロックオは一種、使役でもある。先住民地域、特にアイマラ族の住むアルティプラノ（高地平原）には、スペインの統治以前から続く住民自治組織が現存する。村で生活する以上、村の決定事項に対する賛成の意思表示として村民各自、道路封鎖の為に石を運び置く。もし、置かなければ村八分が待っている。ラパス市内で働く周辺農村の住民は、自分達の村の入り口に自ら石を置き道路を封鎖する、ブロックオでバスが村に来なくなるため徒歩でラパス市まで通う。軍、警察はなぜか一方的なブロックオの排除は行わない。

国南部で発見された豊富な天然ガス。その輸出とパイプライン建設への反対運動は2003年9月「ガス紛争」と呼ばれるまでに激化した。暴動と道路封鎖により国内は広範囲にわたって麻痺状態になる。ボリビアで4番目に高いイリャンプー（標高6368m）山への登山の拠点として有名な町ソラタに数百人の観光客がブロックオ（道路封鎖）により閉じ込められた。5日間経ち、9月20日救出のために向かった政府軍が8歳の少女を含む6名のアイマラ人を殺害するという事件が起こる。住民が守っていたというのが正しい解釈であるという人もいるが、取り残された外国人の一人にソラタで活動中の青年海外協力隊員が居た。

救出作戦が計画された。ブロックオで道の閉ざされているアチャカチ街道を通らず、ラパスから

一度アンデスの峠を越えユングスの熱帯地域に降り、熱帯からアンデス渓谷沿いの別ルートでソラタに救出に向かった。あと一息。ソラタまで25キロメートルのところで別のブロックオに出会いやむなく引き返す。救出作戦第2弾。ソラタの市長がアンデスの峠を越えて協力隊員をラパスまで連れて行くという。自動車に登れるところまで行き、そこから徒歩で峠を越え、ラパスアチャカチ間の国道に降りるといふ。徒歩6時間でたどり着く計画。ラパスから待ち合わせ場所まで救出車両を出す。待ち合わせ場所（ウワリーナ村）にたどり着く。隊員は現れず。漸く携帯電話で隊員と連絡を取る。だいぶ遅れるとのこと。この時間ロスが石を置かれる隙間となり、車両はブロックオの中に立ち往生する。強行突破。投石で車の窓が割られ、バックミラーがもぎ取られる。やむなく車を民家の庭に避難させ徒歩で隊員との新たな待ち合わせ場所に向かう。徒歩2時間、漸く隊員と巡り合えた。再び車まで戻る。車の置き場所はブロックオによりアルファンブラ（絨毯）と化した道路の中になり、移動させることができない。救出作戦第3弾。ラパス市内から再び車両を送る。ブロックオの最前線で彼らの到着を待つ。隊員がソラタの町を出て12時間。漸く車に乗せラパスの町にたどり着くことができた。

抗議行動はますます激化し、ラパス市の衛星都市エル・アルト市（先住民が多く住む）のデモ隊が、首都へ続く主要な道路を封鎖した。ラパスでは深刻な燃料不足と食料不足が起こった。ラパス市の住民も町内ごとに自分たちの意思表示としてブロックオを実施した。ラパス市内の移動も不可能となった。10月13日の週に入ると、アメリカ、ブラジルそしてドイツ各国はヘリコプターにより自国民の救出を開始した。10月18日、ゴニー（大統領）が亡命するとのうわさが流れた。ラパス市のスール（南部高級住宅街）から数機のヘリコプターが国際空港のあるエル・アルト市に向かって飛び立った。あのヘリにゴニーが乗っていると言ふ。国を離れアメリカ合衆国に向かう直前、ゴニ

一は辞意を表明した。

この間、デモ鎮圧のために軍隊が強硬な手段をとったため、70人を超える死者が出た。これを第一次ガス紛争と言う。そして、2005年5月に至り第二次ガス紛争が勃発する。反政府勢力の圧力によりボリビア議会は新しい炭素資源法を制定、天然ガス採掘に対する税率を大幅に引き上げた。しかし、反政府勢力は炭素資源の完全国有化を要求。首都ラパス市が何千もの人によって連日道路封鎖され孤立した。そのため、6月6日にメサ大統領も辞任に追い込まれた。ボリビアのブロックオ文化が二人の大統領を辞任に追い込んだのである。



写真 3：高架から貨物列車を人力で落としブロックオとする住民パワー（2003年11月3日エルアルト市）

インターネットで調べてみた。2013年10月7日付デジタル新聞「Educacion Radiofonica en Bolivia」には、「警察はコチャバンバのブロックオを回避」とある。ボリビアのブロックオ文化は今なお健在である。

## 7. ボリビアで高山病に罹患をしないために

日本ボリビア協会 専務理事  
杉浦 篤

この1-2年、南米のボリビアとペルーを訪れる日

本人が急増しています。

特に、ボリビア・ウユニ塩湖で湖面が巨大な鏡面の様になる雨季の11-5月や、水が無く地平線まで真っ白な塩の湖面が一望できる乾季の6-10月など、一年を通じて多数の日本人観光客がウユニを訪れています。

大半の方は日本や現地の旅行代理店からの情報や、既にウユニを経験した方々の書いたブログなどを参考にしてそれなりの準備をして行かれるようですが、中には十分な準備をしないまま、しかもタイトな日程でウユニへ行かれるケースも散見されます。

あまり公にはなっていませんが、毎年ウユニやポトシの観光、それに手軽に6000m級の高山への登山ができるボリビアへ来訪する外国人の中から、高山病で10名以上の死者や重篤な高山病（肺水腫、脳浮腫）に罹患し後遺症に苦しむケースが発生しています。日本人も決して例外ではありません。

その最大の原因は、富士山と同じ位の高度だから大したことはないと高をくくって必要な準備と対策を取らずにボリビアへ行くことにあります。

因みに、ボリビア・ラパスのエルアルト空港は海拔4100m、ラパス市内は3800m、ウユニ・ポトシは4000mで富士山の頂上より高い場所なのです。（なお、ペルーのクスコは3400m、マチュピチュは2400mですがここでも高山病になる場合があります）。

高山病の厄介な特徴は、この病気への適応力に個人差があり、事前に全く予見ができないことです。屈強な若年男性が罹患して生命が危うくなるケースがあるかと思えば、中高年の女性が平気ということもあります。即ちこれは体質によるもので現地に来てみないと判らないということなのです。（なお、こうなる原因については、まだ医学的に解明されておらず、ボリビア人でも体質の合わない人はラパスやウユニへは行きたがりません。）

以下、適応力や体質に個人差があることを前提に、誰もがすべき最低限の準備と対策をご説明します。

- ① 日本で高山病予防薬の処方を受けて持参する。降血圧剤のダイアモックスという薬を入手し、ボリビア（正確には首都のラパス）に到着する2日前から徐々に量を増やしながら服用する。（N-2日、半錠を朝夕食後2回、N-1日、N日、N+1日（ラパス・ウユニ滞在期間）1錠を朝夕食後2回、N+2日、半錠を朝夕食後2回服用する。）以後は降圧が行き過ぎないように服用を停止する。服用中は副作用して手足の指先の感覚にしびれを感じるが服用を止めれば回復するので心配は無用）

海外渡航科のある専門病院（東京なら西新宿の東京医科大学病院）で、ラパス・ウユニなど2500m以上のボリビア高地滞在期間に合わせて1～10日分の処方（通常は7～10錠）を受ける。ボリビアではソロチという高山病予防薬が売られているが、日本人には効き目が強すぎるので、日本で入手する方が良いと思われる。

- ② ラパス・ウユニ・ポトシ滞在中は、一日に2リットル程度の水分補給を欠かさない。  
これらの場所は、低温低圧低酸素で、かつ大変乾燥しているのと、ダイアモックスは利尿作用があるので水分補給はとても重要である。水分が不足すると手足のしびれが強まり、痙攣を起こす恐れがある。
- ③ 日本発後、ラパス・ウユニ・ポトシへ入る迄の経路を工夫し、余裕を持った日程をたてる。日本からボリビアへは少なくとも2回の乗継が必要で、どの航路でもラパスまで30～35時間かかるので、ラパス到着時は睡眠不足になる。従ってラパスでは1～2泊して高度に体を馴らしてからウユニ・ポトシへ移動することが望ましい。  
間違ってもラパスに着いたその日にウユニへ移動するような日程を組まないことが大切である。（無理な日程を採ると高山病罹患のリスクが著しく高まる。死亡、重篤化のケースはこの日程上の無理が主要原因のことが多い）

理想的には、ブラジルのサンパウロ、アルゼンチンのブエノスアイレス、パラグアイのアスンシオンなどを經由してボリビア東部のサンタクルスに入り、1泊の後コチャバンバ（標高2800m）へ移動して、さらに1泊後、バスでラパス（3800m）へ移動するとその間に比較的スムーズに高度馴化ができる。ペルーのクスコからバスでボリビアへ移動するのも同様の効果がある。

- ④ ラパス・ウユニ・ポトシに滞在中は十分な睡眠をとり、飲酒は厳禁、食べ過ぎも避ける。また、著しい低酸素状態なので、動作は歩行を含めて努めてゆっくり目を心掛ける。走ったり、重い荷物を背負ったり、急坂を急いで登ったりしないことも大切である。
- ⑤ ラパスに着いたら、市場でコカの葉を買って（1袋5ボリビアアーノ；1～2米ドル）噛む。食事の間に噛むとその覚醒作用で頭痛や吐き気が幾分緩和される。（なおコカの葉を噛むことはボリビア国内では法的にも全く問題ない。独特の青臭さと、口中がコカの葉緑素で緑色になるのが少し欠点だが効果はある。）
- ⑥ 著しく高度適応力が不足する人のケースでは、ラパスの空港で飛行機を降り空港ビルまで歩く間、入国・税関審査の間、空港からラパス市内へ移動中、ホテル内などに、激しい頭痛や吐き気、眩暈などに見舞われ、呼吸困難となる。

このような場合には、直ぐに空港やホテルの係員へ体調不良を告げて、一刻を争って備え付けの酸素ボンベ（常備されている）を入手し応急処置として酸素吸入をする必要がある。

（タクシーで移動中ならドライバーに告げて、直ちにラパス市内の大病院へ急行する）  
その後はサンタクルス（標高500m以下）など低地へ空路で直ちに移動する。命に係わるので間違っても自然回復を期待して我慢したり低地移動を躊躇してはならない。

### 新入会員(敬称略)

#### (平成25年度) 後半

(個人会員)、坪井創、松村秀明、中部全人

#### (平成26年度) 前半 10月31日現在

(個人会員) 平井克政、山下洋平

上野山英里、小畑和彦、海沼正利

ヤング里美、仁田原幸、川浪ときわ

### 会員の皆さんへのお願い

この Cantuta を会員の皆さんや、その関係者の出来るだけ多くの方々に目を通し楽しんで頂けるよう、内容・デザイン・発行回数・送り方等のレベルアップを図るために、会員の皆さんから、アイデア・アドバイスや、ご意見を頂きたいと思っております。メール、または電話で、下記へご連絡頂けると大変助かります。

メール : [admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

電話番号 : 042-673-3133

### ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

#### 「ラパス日本人会 90年の記録 1922-2012」

既に HP で告知されていますが、ラパス日本人会により標題の本が刊行されました。日本語とスペイン語併記です。

価格 : 2500 円 (送料込)

#### 編集後記

当初の予定では平成 26 年央発行の予定でしたが諸般の事情により約 4 か月遅れましたことを深くお詫び致します。

#### 「ボリビアに生きる」日本人移住 100 周年誌

上記 2・Los japoneses en Bolivia の日本語原典です。

価格 : 2500 円 (送料込)

(編集委員)

白川光徳 杉田房子 杉浦 篤 金木克公  
細萱恵子

頒布手続きは以下のとおりです。

注文先 : 当協会まで住所氏名、電話番号、注文冊数など明記の上、ご連絡ください。

E-Mail : [admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

事務局 : Tel/Fax : 042-673-3133

振込先 : ゆうちょ銀行・記号 10060 番号 78529321

・三菱東京 UFJ 銀行・名古屋営業部・普通預金

番号 0260675 名義人 杉浦 篤

振込みが確認され次第、送付させていただきます。